

【研究ノート】

「篠路歌舞伎」から
「篠路子ども歌舞伎」へ
— 農村歌舞伎の伝承について —

高橋 克 依

研究ノート

「篠路歌舞伎」から「篠路子ども歌舞伎」へ ——農村歌舞伎の伝承について——

高橋 克依

Katsuyori TAKAHASHI

目次

1. はじめに
2. 村の基盤づくり
—昭和9(1934)年を中心に—
3. 大沼三四郎をとりまく社会
の変化
4. 戦後の流れ
—昭和30(1955)年以降を中心
に—
5. むすびにかえて

[Abstract]

From Shinoro Kabuki to Shinoro Children's Kabuki: On the Inheritance of a Rural Kabuki

Shinoro Kabuki is a rural kabuki performance, which was begun in 1902 by people who immigrated to Shinoro Village (now part of Kita Ward, Sapporo City) in Hokkaido. The leader of the activity was ONUMA Sanshiro, who eventually became the mayor of the village. This theatrical activity continued to flourish until 1934, when he retired as an actor, and it made an important contribution to the development of the community. Since 1986, the children of Shinoro Chuo Nursery School have regularly performed children's kabuki. This tradition is regarded as a revival of Shinoro Kabuki and is currently one of the most familiar traditional performing arts in Kita Ward. However, to date, the 50-year period from the retirement of ONUMA to the revival of kabuki by children is rarely the subject of consideration in the research on Shinoro Kabuki. This paper discusses the significance of this period by reviewing the history of this area on the basis of facts that have emerged from recent re-examinations.

1. はじめに

現在の北海道札幌市の北部に、かつて篠路村が存在した。その村の烈々布と呼ばれた集落において、明治35(1902)年以降、大沼三四郎を中心とする若者たちが歌舞伎をはじめとする演劇活動に力を入れていたという事実、昭和40(1965)年ごろより掘り起こし作業が始まり、「篠路歌舞伎」^(注1)という名前が与えられ、その存在が知られるようになり、現在に至っている。

この大沼三四郎については、集落の演劇活

動において類まれなリーダーシップと歌舞伎の能力の持ち主であったこと、さらに、のちに戦後初の民選による村長に就任したこと、篠路歌舞伎の特異性が注目の的となったこと、そして昭和9(1934)年の引退興行によって活動の一線から身を引いたということまでの歴史が、すでにくつつかの出版物の中で語られている。

しかし、篠路歌舞伎を詳しく紹介した書物や記事等も、「その後」について語ることは少なかった。つまり昭和9(1934)年に花岡義信(=大沼三四郎)が引退興行をおこなって

キーワード：篠路歌舞伎、篠路子ども歌舞伎、農村歌舞伎、北海道

Key words: Shinoro Kabuki; Shinoro Children's Kabuki; Rural Kabuki; Hokkaido

以降の「篠路歌舞伎」はすっかりその鳴りを潜め、昭和61(1986)年に「篠路子ども歌舞伎」として突如復活したかのように語られる傾向が強く、よってこの間の事実には目が向けられることもなく、検証もされてこなかった。大沼の引退以降、50年間という空白を経て、昭和61年にいきなり「伝統行事」というレッテルを貼られ、子どもが継承の担い手となったかのような表現のされかたすらしていた。

今回、関係者への聞き取り調査や、資料の再検討などを通じて新たな考察の可能性を痛感したことは、むしろこの「空白」の50年間の持つ意味である。そして注目すべきは、昭和9(1934)年と昭和30(1955)年という2つの年が篠路にとって大きな意味を持つ年であるという事実が明らかになったことである。本稿は、ここに焦点を当てることによって見えてくる「篠路」と「篠路歌舞伎」のさらなる研究の可能性について書き留めるものである。

2. 村の基盤づくり

—昭和9(1934)年を中心に—

大沼が中心となって指導にあたったとされる「篠路歌舞伎」の持つ意味は、「花岡義信引退興行」翌年の昭和10(1935)年に旧烈々布神社に建立された「花岡義信之碑」に象徴的に見て取ることができる。大沼三四郎の芸名である「花岡義信」の名が刻まれた竿石と、その下に刻まれた257名の協賛者の名前の連なる台座は、そのままそれまでの篠路村の姿を雄弁に今に伝えている。つまりそれは、青年会の若者たちが結束し、素人歌舞伎を盛り上げ、篠路の基礎を築いた極めて歴史的意義をもった情熱と、その背後に常にあった、移住者たちの定住を巡る苦難とその克服の歴史を後世に語り伝える力を秘めた資料と言えるのである^(注2)。

さらに、花岡義信引退の翌年に設置されたという事情を考えると、これはこれまでの演

劇活動に村人たちがひとつの区切りを見出した記念碑と見ることもできる^(注3)。それほどまでに大沼三四郎のリーダーシップと、彼を中心として展開された演劇活動が村人に与えてきた力の大きさは、篠路村の成立史に不可欠の要素となっている。

篠路の演劇活動は若者たちの成長と不可分の関係を持っていた。つまり、演劇活動が若者たちの結束を強化し、それによって青年会活動が充実することとなり、消防組などの関連活動にも大きな影響を与えることとなった。これは、地域における労働の担い手であり、結束の要となる若者たちの力を集約することに成功したという点で、ひとつのモデルケースとして認知すべきであり、篠路歌舞伎とはその結束の成果物として記憶されるべき価値がある。

ただ、花岡義信の引退興行と石碑の建立をもって、篠路歌舞伎の終焉と簡単に判断をくだしてしまうことはできない。村にはこの時、新しい活動が用意され、大沼にも新しい役割が与えられようとしていた。言い換えれば、篠路は新しい局面に入ること、その姿に変化を生じさせようとしていた。そしてこの新しい局面は、決して篠路歌舞伎と無関係と言うことはできない。

先の引退興行の同年(昭和9年)は、篠路村にとって注目すべき年となったことについては、先述の通りこれまで指摘されたことはほとんどない。『篠路村史』では、この頃の村の動態について、人口の点で「再上昇期」と位置づけながらも、「漸く停滞期を脱して再度上昇期に転じようとしているが、躍進すべき社会的条件がないために伸びきれない」と評している(24頁)。しかし、「社会的条件」は確実に整備されつつあったというのが本稿の見方である。昭和9年はそういう評価が可能な年なのである。

この年、村は村医として当時34歳の林賢治医師を迎える^(注4)。さらにこの年には、村初

初めての「農繁期篠路託児所」も篠路小学校内に設置される。この託児所と林の関わりを示す直接的な資料は今の所発見できないが、施設の性格を考えるに、そして、着任と設置が同月であることを考えても、両者の関連性を強く連想させる(『村史』84頁)。林自身は、「若年の頃の私は子供の命を守り体をはぐくむ事に集中した」と『あゆみ』の中で語っており、彼の医師としての関心のひとつが子どもに対する福祉問題にあったことを伝えている(3頁)。「開村以来一貫して農村」(『村史』39頁)という篠路村は、その産業構造の強化をはかるために、加えて「産めよ増やせよ」の時流にのって、福祉活動の充実に舵を切り、いわゆる「銃後の守り」を固めていく。時代風潮から察するに、村会議員という要職にあった大沼が演劇活動の一線から身を引いた理由のひとつとして、青年会活動の一環とはいいいながらも、これに傾倒している余裕はもはやなくなってきたという見方もできる。次章ではこの篠路村の福祉活動に目を向けてみたい。

3. 大沼三四郎をとりまく社会の変化

ちなみに、明治・大正期を通じて、篠路村の社会福祉関連の活動を伝えるものは今の所ほとんど明らかになっていない。『篠路村史』の中では、これらの時代を指して「制度としての社会事業がまだ確立されていなかった時代」とし、明治30年代の石狩川の氾濫時の北海道庁による「救恤」がなされたことを記すのみである(84頁)。これはつまり、『村史』において「人口急減期」として記されている時期のことで、その人口変動の要因のひとつを明治31(1898)年と37(1904)年の二度にわたる石狩川の氾濫としている頃のことである(24頁)。

篠路村の歴史では、福祉に関連する事柄がはっきりと記されるのは、前述の「託児所」以降のことと見受けられ、これ以降、すなわ

ち花岡義信の引退とあわせるかのように、篠路は福祉活動が際立つ時代をむかえることになる^(注5)。つまり、歌舞伎という祭祀が人々の紐帯となり、それが離村防止や数少ない娯楽として機能していた時代から、具体的な福祉政策の力によってコミュニティをまとめようとする時代へと移行していったことがはっきり見て取れるようになる。この時期の周辺事情として指摘すべきは、まず昭和10(1935)年に「経済更生計画樹立村」の指定を受けたことである。これは、「昭和五年から七年にかけての凶作により疲弊し、窮乏した農村の更生のため」に北海道庁によって策定された計画に基づいて指定を受けた町村のことを指す。(『新札幌市史』4巻4:171頁)^(注6)。つまりこれは、この当時の篠路村における経済状況が、例外にもれず逼迫したものであったことを意味する。こうした状況の中で、民生委員制度の前身となる方面委員制度が導入されることとなり、弱者の救済にまつわる政策にも目がむけられるようになってゆく。大沼三四郎においても、昭和12(1937)年に方面委員の嘱託を受け、その年の内に副常務委員、また、翌々年には方面委員常務委員の役職についたことが記録されている(『篠路烈々布百年』172頁)。これは村会議員としての彼の責任の範囲が、拡大を重ねていったことを容易に推測させる事実である。別の言い方をすれば、昭和9年の「引退興行」は、やはりここでおこなわれなければならないものであった。

昭和12年になると、篠路村は恩賜財団愛育会より、北海道で初めての「愛育村」として指定を受ける。愛育村とは、昭和9年の「皇太子殿下御誕生ニ際シ本邦児童及母性ニ対スル教化並ニ養護ニ関スル諸施設ノ資トシテ金七十五万円下賜候旨御沙汰アラセラレ候」との御沙汰書を元に設立された同会(『母子愛育会五十年史』45-7頁)の事業のひとつとして推進されることになった事業である(同191

頁)。篠路村における愛育村事業への取り組みの詳細については、現在、恩賜財団母子愛育会(東京都港区)に保存されている『北海道愛育村ニ関スル書類』としてひと綴にされたものによってうかがい知ることができる。これによれば、村内に「愛育班」が組織され、その班は村長を会長とし、各字の分区長や相談役、また「戸毎に巡廻し、妊産婦の取扱、日常生活法、赤ん坊の育て方、取扱法出産、産褥の手當等一切の知識技術を實地に指導」(『北海タイムス』昭和12年8月18日付)した班員などで構成されていたことがわかる。

もちろん、この中の相談役には、村会議員としての大沼三四郎や村医としての林賢治の名前も見える。また例えば、昭和12(1937)年度の事業計画によれば、小学校等を会場として、展覧会、映画会、講演会などの教育事業や妊産婦や乳児・児童らの健康診断などが月ごとに展開され、村内の母子の健康事情に関わる総合的な推進活動がなされていたことが見て取れる。当然のことながら、『経済更生計畫書』の中にも、「非常時財政経済政策ニ順應スルト共ニ消費ノ節約ニ努メ、且一村ノ融和ヲ圖ル爲」の心得のひとつとして、「本村母子愛育會主催ノ健康診断ヲ必ず受ケルコト」が期待されている旨の記述が見え、経済更生と福祉の充実が時宜にかなっておこなわれていたことが確認できる(78頁, 83頁)。

愛育村事業そのものは、戦前から戦後にかけて展開されてきたが、それがどのような性質を帯びていたものかについてここで議論をする余地はない。しかし、少なくとも、戦前期早々に指定された篠路村に関する限り、『母子愛育会五十年史』にある「戦力確保と生産力増強の見地から、人口増強政策の一環として母子保健対策が推進されるようになったためである」(199頁)という戦時的要請にかなったものであり、また、それは篠路側の資料(『愛育村ニ関スル書類』内の村民の乳幼児健診受診を促す配布物)の中で、全村の乳幼児

診断が「非常時下に於ける国民の努め」であると断言している文言からも十分に立証されることである。

しかしそれでも、当時としての意味で、それは子どもたちの成長、ひいては村への貢献という点で疑う余地はなかった。そしてそこに、大沼三四郎と林賢治が重要な働きをしていたことも、再度強調しておきたい。林は、この時代をかえりみて、「昭和十九年には乳幼児の死亡率は当時の欧米なみの五・二%迄引下げる成果を見た」(『あゆみ』3頁)と述べている^(註7)。少なくとも子どもに対する当時の福祉をめぐることは、大沼と林はまさに政治と医療の両面から協力関連にあり、村の発展に貢献する時代を共に支えていたと言えるのである。

4. 戦後の流れ

—昭和30(1955)年以降を中心に—

戦後、篠路村は民選村長の時代となり、昭和22(1947)年、大沼が無競争でその地位につく。当然のことながら、彼のこれまでの村会議員としての実績や篠路歌舞伎を始めとする地域活動でのリーダーシップが村民の理解を得たゆえの結果であることは間違いのないことだろう。さらには、それまでの方面委員制度も民生委員制度へと改められ、昭和26(1951)年には村に社会福祉協議会が設置され、林賢治が初代会長として就任する^(註8)。この年、大沼は村長として再選され、また福祉協議会の顧問にも就任している。福祉問題に関する限り、大沼と林の両者は、戦前からの協力関連を維持し続けており、戦後体制の篠路村の中でもその関係が不変であったことが見て取れる。

昭和30(1955)年、篠路村が札幌市と合併することにもない、大沼は政治の世界から引退することになる。しかしこの年、林は戦前の活動を継承するように、篠路季節保育所を

開設し、農繁期に限ってはいるものの、福祉事業の充実に貢献している^(註9)。そしてこの保育所が、のちに篠路中央保育園として認可を受けるのは昭和46(1971)年のことである。さらに林は、保育園事業の他にも、昭和34(1959)年から、政治家としての大沼の跡を継ぐように、市議員として市政の一翼をになうようになる。

昭和9年から際立ってきた篠路村の福祉事業とは、大沼と林の奇遇とも言える接近に始まり、互いの充実した協力関係の発揮、さらには政治的な継承に至る絶妙な流れに乗って守られて来たと言える。言い方を変えれば、彼ら二人の出会いと、村に対する共通の思いがなければ、定着しなかったことのようにすら思える。この福祉の充実が育てたものは、未来の篠路歌舞伎の継承者であったのだ。つまり篠路歌舞伎は、50年の間、その再演の好機の到来を待つ状態にあった。その間に村は文字通りその舞台づくりを着々と進めてきたと言えるのだ。

その孵化の瞬間は、昭和60(1985)年にやってきた。きっかけは、「篠路コミュニティセンター」が設置されることとなり、落成記念の祝賀会のおり、柳沢正幸を座長とする「ほてから座」が組織されて、『白浪五人男』が演じられたことである。この流れを受け、「篠路歌舞伎保存会」が設立され、中央保育園の子ども達が衣装に袖を通すことになった(『篠路歌舞伎保存会30年のあゆみ』37頁)。この時の保存会初代会長は柳沢正幸であり、彼は同時に林の死去後社会福祉協議会の会長、さらには中央保育園の二代目理事長であったことにも、瞠目せざるを得ない。

「保存会」結成の背景についても、細かな検証が必要であろうが、目下言えることは、柳沢を中心に「保存会」と「子ども歌舞伎」は表裏一体の関係であること、つまり、「保存会」の設立意義を具体化する形で「子ども歌舞伎」がおこなわれるようになったという

ことである。当時の保存会の会員にも、福祉協議会関係者をはじめ、連合町内会関係者に加え、各地区の青少年育成委員会会長の名前が見えることに、会の性格の一端が垣間見える(『30年のあゆみ』37頁)。柳沢自身の意識は、「保存会」設立10年後に書いたと読める直筆の原稿が、『30年のあゆみ』の中に複写されており、そこから読み取ることができる。「郷土の伝統芸能文化を園児たちにもふれさせてやりたいとの園長の熱意から」「中央保育園の子供歌舞伎を支援しながら」「保育園とも密接な連絡を取合っていく」(『30年のあゆみ』43頁)といった言葉の中に、保育園と保存会の不即不離の関係を当然視、重要視していた姿勢があらわれている^(註10)。

5. むすびにかえて

篠路歌舞伎は、大沼三四郎によって創始されて以来、地域の青年会の中心的な活動としておこなわれてきた。つまり若者たちに対しては、広義において教導的意義を多分に含んだ活動とすることができる。花岡義信(大沼三四郎)の引退興行は、明治から続いた篠路の演劇活動のひとつの分岐点であったことは間違いない。ただ、分岐点であるからこそ、その後の篠路に関しては、歴史的事実の持つ意味について再考するする必要が出てきた。それは、政治家大沼三四郎が篠路に撒いた種と、それを育み継承した人材に恵まれた、類まれな地域の姿そのものの再検証である。福祉を充実させるという昭和期の政策が、大沼三四郎と林賢治、さらには柳沢正幸という逸材によって、篠路の中で熟成させられてきたことが、篠路にとっての大きな強みとなった。「篠路子ども歌舞伎」は、篠路において、生まれるべくして生まれたものである。始められるべく、種は予め撒かれ、育てられていた。そしてその土は地域の人々によって守られていたのである。

篠路歌舞伎と大沼三四郎のリーダーシップに言及する時、よく引用される言葉がある。『篠路村史』の中で、村長大沼三四郎が村のことについて「弱小なので大町村に伸びきれない。だからなんとかして大きくなりたいといつも考えていた」と述べたくだりである(5頁)。これは大沼の偽らざる本音であり、熱意の証しでもある。その熱意を継承する豊かな人材に恵まれ、その彼らによってはくぐまれてきたコミュニティの姿は、明治に始まった北海道への和人移住の好例のひとつとして、さらなる論考の価値を持っている。目下、まだそのすべてを証す力に恵まれてはいないが、この篠路の歩んできた道にさらなる光が当てられれば、演劇と地域の人々との関連性は言うに及ばず、未だ知られざる北海道史に耳目をあつめることにも大いに貢献することは間違いない。

[謝辞]

本稿執筆にあたっては、札幌市北区、札幌大谷大学、北星学園大学との間で取り交わされた「伝統文化育成プログラム促進事業における事業連携」に基づいておこなわれた調査やインタビューによって得られた成果を使用している。関係各所に御礼申し上げる。

[注]

- (1) 篠路村で当時移住者たちによっておこなわれていた演劇活動を後年「篠路歌舞伎」と命名したのは当時の札幌藻岩高校教諭菅村敬次郎とされる。筆者はこれまで、活動当時を写した写真資料などを根拠に「烈々布素人芝居」と呼んできたが、こんにち「篠路歌舞伎」があまりにも人口に膾炙した感があるので、本稿においても「篠路歌舞伎」という言葉を使用することとする。
- (2) 「花岡義信之碑」は2021年調査時、倒壊を防ぐため竿石と台座部分が切り離されて保存され

ている。

- (3) よって、実際にこれを持って明治から続いた篠路歌舞伎の終焉とする考え方が一般的である。しかし、村の演劇活動は形を変えて継続されていたことを、大沼三四郎の孫の大沼靖男が証言している。「歌舞伎じゃないけど、芝居も盛んでしたね。会館で。村祭の芝居。爺さんが教えてた青年団がやったんでしょう。」(2021年9月1日聞き取り)
- (4) 林賢治は明治33(1900)年、札幌に生まれ、日本医科大学専門部を卒業の後、神恵内村村医等を経験の後、篠路村に赴任する。なお、村医という概念については、明治期にすでにあったことが『新札幌市史』で確認できる。当時の札幌区周辺の村の場合、明治二十年代を指して「各地で村医設置運動がおこり、三十一年段階では札幌村外四カ村、上手稲村外三カ村、月寒村外二カ村に村医が設置された。また白石・上白石村においても、人口増加にともない開業医が不足し急病患者に対応できないという理由から、三十一年村医設置がようやく認可された」(2巻通史2:991-93頁)とある。篠路村としては、いつから村医が置かれるようになったのかは、目下判然としない。
- (5) 『民生児童委員四十年の歩み』には、明治39(1906)年の篠路村役場設置以降について、「低所得者層が多いために担税力が弱く、村の福祉の面においては全く考えられず昭和九年に札沼線の開通と村医がやっと置かれて当時の村民は何物にもかえ難い福祉の光として大いに喜んだのであった。」(13頁)という記述があり、やはり昭和9年以降に福祉が充実し始めたことを書き表している。なお、本書は表題(『民生委員制度四十年の歩み』)と奥付の題名が異なっているので、奥付の情報を優先した。
- (6) 篠路村は、この指定により、「篠路村経済更生計画実行委員会規約ヲ制定シ、村會議員、小學校長、農事實行組合長、區長、常設委員、在郷軍人分會長僧侶ヲ委員ニ依嘱シ、役場吏員、農會、産業組合、農檢職員中ヨリ夫々幹事ヲ囑託シテ以テ本村經濟更生計畫実行委員會ノ体制ヲ整備」した。(『経済更生計畫書』1頁)
- (7) 村医赴任当時の林が見ていたであろう篠路村の乳幼児死亡率については、『篠路村史』の中で、「母子愛育村指定の経緯」について書かれ

た章に、「乳幼児死亡率は例年一三～一四%の間にあり、他農村に比し必ずしも高度とは言い得なかつたが（当時本道内に於ては四〇%の死亡率を有している町村もあつた）諸種の事情により医療を受くることなく死亡する乳幼児の数は七、八名の多きに達したので、国民保健の見地からするも真に寒心に耐えないものがあつた。」（86頁）とある。一方で、林自身は『あゆみ』の中で、村医赴任当時の事情に触れ、乳幼児死亡率を「三八・九%」と記している（2頁）。

- (8) 当然のことながら、戦後の社会福祉の目的も変化している。『篠路地区社会福祉協議会三十周年記念誌』には、篠路村社会福祉協議会設立趣意書の写し書きが掲載されている。それによれば、本協議会は「公私各団体相共に協力して社会福祉増進を図り、以って平和にして幸福な社会を健設し、人皆共存共榮し得る様、組織的活動を實踐する目的のもと」に設立された。（13頁）
- (9) 季節保育所とはいえ、篠路村に保育所が設置されるのはこれが初めてであった旨、『篠路地区社会福祉協議会三十周年記念誌』に記載がある。46頁参照。
- (10) 篠路中央保育園のカリキュラムに取り入れられた「篠路子ども歌舞伎」は、園児の語彙力の充実にも貢献している。現園長の林茂子は、聞き取り調査において、かつて篠路小学校校長の調査によって指摘されたことを以下のように語っている。
- 「1年生って大体200語くらいの語彙があるのだそうです。ここの保育園の子どもたちの文集を見ていると、いろんな言葉が出てきているから、これをどのくらい持っているのか、ちょっとこの中から拾わせてもらっていいかという話があったので、どうぞどうぞと言って、その先生がちょっと研究してみたみたいです。そして、教えていただいたのが、やっぱり多いねって。普段使わないような言葉がやっぱり出てきているねということで、普通は200語くらいなのだけれども、ここの子どもたちは全部で230語くらいあったって。だから、若干やっぱり多いねって。それはやっぱりこういうこと、歌舞伎をする、台本を読んでせりふを言うとか、そういうことからつながってくるのではないだろうかと言っていたことはありましたね。」（2021年12月7日聞き取り）

〔引用文献〕

『あゆみ：篠路中央保育園創立20年記念誌』篠路中央保育園，昭和49年。

恩賜財団母子愛育会五十年史編纂委員会編『母子愛育会五十年史』恩賜財団母子愛育会，昭和63年。

札幌市教育委員会編『新札幌市史』全8巻。札幌市，昭和61年-平成20年。

篠路歌舞伎保存会編『篠路歌舞伎保存会30年のあゆみ』篠路歌舞伎保存会，平成28年。

『経済更生計画書』札幌郡篠路村役場，昭和13年。富樫邦男編『篠路地区社会福祉協議会三十周年記念誌』篠路地区社会福祉協議会，昭和56年。

富賢隆編著『篠路烈々布百年』篠路烈々布開基百年協賛会，昭和62年。

「母性教化乳幼児の養護へ 本道最初の愛育村 篠路，野幌兩村を指定」『北海タイムズ』昭和12年8月18日朝刊，3面。

『北海道愛育村二閔スル書類』恩賜財団母子愛育会蔵。

北海道自治行政協會編『篠路村史』篠路村役場，昭和30年。

柳沢正幸編『民生児童委員四十年の歩み』篠路地区民生委員協議会・太平地区民生委員協議会，昭和62年。

〔インタビュー〕

大沼靖男（2021年9月1日オンラインにて聞き取り）

林茂子（2021年12月7日篠路中央保育園にて聞き取り）

